

(2) マドリードから 巡礼都市レオンへ

10月18日(木) 11:40 成田発、ロンドンで乗継ぎ、飛行時間15時間30分、真夜中のマドリード着。国鉄チャマルティン駅近くの Hotel Tryp Centro Norte 泊。

10月19日(金) 9:00 マドリード郊外のイエズス会墓地に恩師ディエス神父を墓参。2年前の巡礼出発前日に師を病院に見舞ったが、その翌日、帰天された。日本の学生をこよなく愛し、^{おはこ}十八番の「長崎の鐘」を美声で歌っておられた。墓石を水で清め、竹内が持参した師の遺影写真に祈りのメモ書きとバラを添え、祈りを捧げた(写真右)。



同日 15:00 国鉄チャマルティン駅発、特急 Talgo 号で巡礼都市レオンへ向かった。荒野の中を、時折、小さな町や村で停車しながら 18:58 レオン着。ローマ遺跡の上に築かれたレオン王国はかつて統合スペインの母体として中世の繁栄を極め、巡礼道の要所となった。ルネッサンス様式の旧サン・マルコス修道院、現在は国営ホテルになっているパラドールのファサードを眺めながら 19:30 Hotel Tryp Leon チェックイン。



10月20日(土) 今日中にどうしてもクレデンシアル=巡礼者手帳の発行を受けておきたい。オテルのレストランでバイキング朝食の後、久しぶりのトレーニング気分^{あしばや}で足早に歩く。レオン王国の国王たちが眠る“王家の霊廟”サン・イシドロ教会前の広場を横切り、石畳の細い路地を行くと、13-4世紀イベリア半島ゴシック建築の最高傑作“白い貴婦人”サンタ・マリア・デ・レグラ大聖堂(写真左)の前に出た。この美しいステンドグラスだけは見逃せない。開門時間は未だだ。後でもう一度来ることにして、

さらに細い路地を進むとメルカード広場は土曜の朝市の人出で賑わっていた(写真右)。その先でやっとアルベルゲ=巡礼宿を見つけ、受付の親切なお爺さんにクレデンシアルを発行してもらった。そうこうしている間にも巡礼者たちが今夜の宿を求めてこのアルベルゲに到着してくる。我々もいよいよ明日からだ、武者震い。



(3) レオンから 巡礼出発点のサラアへ

10月20日(土) 14:07 国鉄レオン駅発、急行 Zug 号でモンフォルテ駅まで3時間。ここからはサラアの町までタクシーで約30分。18:00 Hotel Roma チェックイン。

顔だけ洗って早速この町の“出口”を確認に出かけた。巡礼道の町や村には必ず“入口”と“出口”がある。巡礼者は“出口”を通過して西へ西へとサンテアゴ・デ・コンポステラに向かう。



“出口”を確認して後、町を見下ろす丘に上ると、苔むした背高の石の十字架が立ち、近くの道標にはサンティアゴ・デ・コンポステラまでの距離を示す“111キロ”の文字が刻まれていた（写真左から石川、小野、山本）。何百年もの昔からどれ程多くの巡礼者達がどの様な思いでこの道を通り過ぎて行ったのだろうか。丘の麓のサンタ・マリニャ教会では20人程の地元の人たちがタベの祈りの真っ最中。明日

は日曜、早朝に発つ我々はミサに与からないのでここで祈りだけしておく。腹ペコ、夜の夕食は時間が遅くなるのでスーパーでワインと食料を買い、出発前夜の祝宴をオテルの部屋で賑やかに過ごす。11:00 シャワーを浴び、使い捨て用の100円ショップ下着を、勿体ないと思いながら捨て、眠る。が、なかなか寝つけない。準備万端、ぬかりはない筈なのに頭の中を心配ごとがグルグル回る。

心配ごとその一、次の宿、予約済み・・・心配ない。その二、大きくて重い“モチーラ”＝ザック荷物。巡礼ガイドには「背負う荷物の重量は体重の十分の一以下にすること」とある。去る3月、東京銀座の映画館で“サン・ジャックへの道”＝サンティアゴへの道という映画を観た。巡礼者達が重い荷物の中身を次々捨て去る場面があり、思わず声を出して笑ってしまった。ところが、他人ごとではなく竹内、石川の荷物がなんと旅行者並みの重さなのだ。間違いなくくたばってしまう。やむなく食糧、水、雨具、着替えなどをナップザックに移し替え、重いモチーラは、オテルの信用できるタクシー運転手を手配してもらって次の宿へ運ぶ。こんな裏ワザも2年前の経験から得た。

その三、最も楽しみで大切な昼食は体力維持のためにも出来るだけレストランでとりたい。この国には“シエスタ”＝午後の休息時間を一斉に取る伝統的な習慣があり、スーパーや大抵の店は2時から5時まで、郵便局や銀行も4時まで一斉に休む。行く先の町や村のレストランに2時までに到着していないと昼メシにありつけないこともある。夜のレストランの開店は午後9時と遅いので睡眠時間に影響する。かと云って、毎回、スーパーの食料品やバルの軽食では味気ない。



寝不足の朝6時、日曜日だというのにオテルのお母さんが、遠い国から来た巡礼者のためにオテルのバルで朝食を用意してくれた。感謝！幸せ！

大抵、巡礼者は前日に食料と飲み物を買っておいて、途中、休憩して腹に詰めるか、または、うまくいけば9時頃に開く“バル”＝大衆軽食堂でボカディージョ＝フランスパンのサンドイッチにありつく。しかし、そんなバルが何キロ先にあるのか分らない。

7:00、出発の時が来た。外は未だ暗く寒い。気温5度。ナップザックを背負って星空を見上げた。（写真左から小野、石川、竹内、山本）（つづく）